



ペンを持つのがいじりな
十月九日の事態は、本学か
の教育、研究、学問の自由
の喪失である。

形骸化された教授会

農学部 教授 山本大二郎

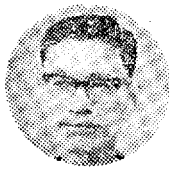
「キリストはなぜバラバを」と叫ぶ聲が、罪
なきキリストを処刑した。「社会保障より準備を
」。「大学教育の検討より規制を」として、
大学立法は臨時措置のままだとされて成立し、自ら
権威を振っている。
農学部では学部長が少教のメンバーの意見を聞く
たが、個人の前で「生田地区への機動隊導
入」の同意を十七日にしている。そして、十
月八日に臨時教授会を求め、十二時間にわたる議
論、出席の中で「形骸化」され
た教授会である。教授会の権威もはたして、

(分析化手)

役員になり二介の教員が、意見を述べた場もな
なされた。中央集権制の管理も、
「モラル」はすでに存在する結果を示し
た。大学の危機という簡単な言葉で済んでおら
ない。三月のストライキ中、私はしばしばリーカー
をへら、講義の語の討論集に参加して来
た。このころの逆反教授の言のたさきもあ
る。このころは「政治」は「政治」は
選挙のために「形骸化」されてはな
ない。選挙の場を破ることも、この言葉で
ることがある。政治を引合に出すのは見聞が
あろうが、わ
れわれにと
て必要なのは
沈黙の壁を
破ることは
なかつたやう

謙虚さと自信持て

大学院 職員 宗 進



二十世紀の後半にあって、どのように生きぬか
ねばならぬかを、私は私なりに考えているつもりで
ある。
しかも荒廃化した大学の内にあって、私の考えは
どうすればいいかわからない。が、どのような境
に直面しても、冷静な考え、夢は抱けないように努め
ようと思っている。
そしてなかで、本学の討論、そして解除という
経緯をとおして、現在の学生運動にたいする私の考
えを述べたい。それは正直に言っておくのである。
学生が大学の改革を模索し、大学の理想像に向
て行動する
真摯な態度
にたして
は、それが
誰れであ
っても、認め
なければならぬ。そこでこの学はなげな
い羽のあつてを定めておきたい。
しかし、そこには必ず謙虚と明日への自信(過
信はなげ)がなければ、道義の道、道義の中に進
没しかねないこととなる。
人間が大学なり社会の責任を担うのは、歴
史の教えるところである。その意味で道義の道承
とその道義にたかしなければならぬのは、当然
のことである。
したがって、それは単なる目標ではなく、永遠
なるものがある。それとすれば、学生
を指導する者は、つねに「われからの責任が求められ
るであらう。でなければ、結果は悪であらう。た
り得ないし、たが表皮の崩壊を意味する。その責任
はなかるか。
私は、どのような行でも、未来への道義に
責任をたいする責任の所在が明確でなければ、変
革に結びつかないのではないかと考え、つまり、
己の孫子の時代に、己の理想が開花するものであ
ってもよい。その意思のよいものでなければ、大学
なり社会なりは、拒絶反応を示すことになるであらうと思
われるからである。
現在、大学が仮面いながら、その存在を呻吟
しているや
き、私はこ
の事実の前
に、われわ
れの責務
が、「現世」

(書記)